小学校英語の教科化に向けた教養課程における英語教育

English Education in the Foundation Course of the Universities to Teach English as a Subject in Elementary Schools

福 島 治 子*
Haruko FUKUSHIMA

Abstract

In March 2017, the country's curriculum guideline for elementary school was revised. Under the new education guideline, students in the fifth and sixth grade, who are currently participating in class activities using English, will have to study the language as a regular subject, including reading and writing it, and take 70 lessons a year. Children will begin learning English from the third grade of elementary school, two years earlier than the current starting level.

According to this reform, we have to improve curriculum to have the students learn practical teaching abilities related to English classes in order to develop students' ability in the universities. In the two English classes for freshmen and junior, the contents related to not only English ability but also basic knowledge and skills necessary for teaching English were carried out during the 15 class period from April of this year. At the last lesson of each class, questionnaire survey was conducted.

The survey data shows an overall positive reaction to the contents, such as 'I felt more motivated to learn English.', 'I was aware of consciousness of the difficulties in teaching English in the elementary school.', 'The anxiety was reduced by experiencing the presentation.' Thus it can be seen that the students preferred this kind of English class. The measures give a good influence to the students. Especially the hands-on learning experiences, such as the use of classroom English, various kind of activities, and group work, are very effective.

１．小学校における外国語教育「教科化」への経緯及びその現状

（１）小学校における外国語教育「教科化」への経緯

2008年３月に改訂された学習指導要領により、2011年度から小学校５・６年生を対象に、外国語活動が週１コマ導入された。教科としては位置付けず、音声や基本的な表現に慣れ親しむことが中心とされた。

2013年５月、「教育再生実行会議」第３次提言に、「小学校の英語学習の抜本的拡充、実施学年の早期化、教科化、指導時間の増加」などが盛り込まれ、2017年の小学校学習指導要領改訂の内容につながる小学校における新しい外国語教育導入の動きが始まった。同年12月には「英語教育改革実施計画」が公表され、「小学校３・４年生では活動型で週１～２時間、５・６年生では教科型で週３時間程度」という計画が提案された。

さらに、文部科学省は2014年２月に「英語教育の在り方に関する有識者会議」を設置し、次期学習指導要領の改訂に向けての本格的な検討が行われた。同会議は９月に「今後の英語教育の改善・充実方策について：グローバル化に対応した英語教育改革５つの提言」として、その議論をまとめた。11月には文部科学大臣から中教審初等中等教育分科会教育課程部会への諮問が行われ、2015年８月の「論点整理」を経て、2016年12月に「答申」が取りまとめられた。

*くらしき作陽大学 子ども教育学部 Kurashiki Sakuyo University, Faculty of Childhood Education

（２）小学校における外国語教育の現状

2017年３月末に告示された新学習指導要領により、2011年度から小学校高学年で必修科目として週１コマ実施されている「外国語活動」が、2020年度からは「外国語科」として正式教科となり、週あたり２コマ（年間70単位時間程度）行われ、中学年では初めて外国語活動が必修となり週１コマ（年間35単位時間程度）行われることになる。2018年度及び2019年度における外国語活動の授業時数及び総授業時数は、小学校３・４年生では新たに年間15単位時間を確保し、「外国語活動」を実施し、５・６年生では新たに年間15単位時間を加え、50単位時間を確保し、「外国語活動」の内容に加えて、「外国語科」の内容を扱うことになる。

また、新小学校学習指導要領では、外国語教育における「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の３つの資質・能力を明確化した上で、各学校段階の学びを接続し、「外国語を使って何ができるようになるか」が明らかになるように、目標・内容の改善・充実がなされている。

小学校・中学校の目標設定に関しては、学習指導要領の「第１　目標」において、小学校中学年「外国語活動」、小学校高学年「外国語」、及び中学校「外国語」のそれぞれ位置付けの違いが明確に示されている。

【小学校中学年「外国語活動」】

…コミュニケーションを図る<u>素地となる資質・能力</u>を育成することを目指す。

【小学校高学年「外国語」】

…コミュニケーションを図る<u>基礎となる資質・能力</u>を育成することを目指す。

【中学校「外国語」】

…コミュニケーションを図る<u>資質・能力</u>を次のとおり育成することを目指す。

すなわち、現行の小学校高学年の「素地」、中学校の「基礎」の部分が、それぞれ小学校中学年、高学年に移行し、中学校では新たに「コミュニケーションを図る資質・能力」そのものの育成が目標になっている。

また、「第２　各言語の目標及び内容等」では、小学校・中学校とも「話すこと」が「やり取り」と「発表」の２領域に分けて示されるようになった。これに伴い、小学校中学年の「外国語活動」では「聞くこと」、「話すこと［やり取り］」、「話すこと［発表］」の３領域、小学校高学年及び中学校の「外国語」ではこれに「読むこと」と「書くこと」を加えた５領域となっている。

小学校中学年から「聞くこと」「話すこと」を中心とした外国語活動を通じて外国語に慣れ親しみ、外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年から発達段階に応じて段階的に「読むこと」「書くこと」を加え、総合的・系統的に教科としての学習を行うことが示された。

２．小学校教員養成課程の現状と課題

（１）小学校教員養成課程の現状と課題

今後、小学校教員は、新小学校学習指導要領に示された目標を目指し、その内容を指導していかなければならない。「外国語科」という正式な教科となる小学校高学年では、学級担任が英語教育に関する専門性を高めて指導するとともに、併せて専科指導を行う教員や、ALTを一層積極的に活用し、「外国語活動」を行う中学年では、学級担任が中心となって指導をするようになる。久村（2017）は、「小学校教育関係者にとって、英語指導者の育成や新しいカリキュラム・フレームの作成が喫緊の課題となっている。」と述べているが、学校現場では、新学習指導要領に示された新しいことへの不安感や負担感の声が聞かれる。また、学校現場だけでなく、小学校教員を養成する大学においてもその対応は急務である。

現在の小学校教員養成のカリキュラムでは、全教科の指導法を学ぶようにはなっていない。しかし、大学を卒業すれば、すべての教科を指導するようになる。教員養成・教員研修のコア・カリキュラム（東京学芸大学、2017）が完成し、今後コア・カリキュラムに基づいた質の高い教員養成が各大学で

実施されることが期待されている。特に、2020年度から小学校高学年で外国語が教科化されることに伴い、従来の外国語活動だけでなく、教科としての外国語も指導できる英語運用能力・指導技術を持った教員を養成することが、これからの小学校教員養成課程で求められてくる。

小学校教員養成課程の外国語（英語）コア・カリキュラム（東京学芸大学、2017）では、２つのことを目標としている。一つは、授業設計と指導技術の基本を身に付けること。もう一つは、小学校において外国語活動・外国語の授業ができる国際的な基準であるCEFR Ｂ１レベルの英語力を身に付けることである。この目標を達成するために、大学でコア・カリキュラムを効果的に反映させたプログラムを構築・運用することが重要になっている。本学においても全学共通英語教育コア・カリキュラムに関する提案が2017年１月になされ、４月から実施されている。このカリキュラムに基づき、英語の授業、限られた時間を、いかに小学校教員を目指す学生にとって有意義で、小学校の教育現場において役立つものにするかが重要である。

（２）本学における小学校教員養成課程における英語教育の現状

学校現場の課題が複雑・多様化する中、教員養成課程において、実践的指導力や課題への対応力の習得が不可欠となっている。新小学校学習指導要領のもとで実施される「外国語科」・「外国語活動」においても実践的指導力を付けることは重要な課題である。

本学の子ども教育学部子ども教育学科（小学校・特別支援学校コース）の2017年度入学生のカリキュラムでは、「専門に関する科目」において、「教科に関する科目」として、「外国語」（２単位）が「選択」で２年の前期に、「教職に関する科目」として、「外国語の指導法」（２単位）が「選択」で３年の前期に開講されている。「各資格・免許取得のための必修科目」となっているので、小学校免許状を取得するためには、必ず受講するが、この科目において、小学校の「外国語活動」・「外国語」の授業に必要とされる英語力・指導の技術等を身に付けることはより重要性を増し、その内容の充実が急務となっている。岡秀夫、金森強（2012）は、「今後、教員養成の役割はますます重要になってくると考えられます。明日の小学校英語を担うのはまさに彼らであり、良き人材をしっかりと育てることは極めて重要です。半期の授業でも、すべての領域の学生たちが小学校の外国語活動のあり方や指導、教材づくりについて学ぶことが必要といえます。」と述べている。

また、現在の学生の英語力、例えば、子ども教育学部小・特コース３年の38名が昨年12月に受けたTOEICのスコアは、平均293.6であり、250～349のスコアの学生が20人で、在籍者の半数以上を占める。そして、それより低いスコアの学生が10名いる。このような状況下で、小学校において外国語活動・外国語の授業ができる国際的な基準であるCEFR Ｂ１レベル（TOEIC 600）の英語力を身に付けることはかなりの困難を伴うと考えられ、小学校教員を目指す、特に英語を得意としない学生について、「専門・教職に関する科目」のみで、小学校において、「外国語活動」・「外国語」の授業ができる英語力・指導力等を身に付けた教員を養成することは困難である。しかしながら、このような状況を踏まえたうえで、英語力や英語の指導力を身に付けさせるためには、英語のインプット・アウトプットの量を少しでも増やし、学生に小学校現場で英語を教科として指導していくのだという意識・自覚をもたせ、実践的な英語運用力を授業場面を意識しながら身に付けさせる必要がある。西崎（2017）は、「英語が得意でない学生にとって小学校英語の指導は重荷でしかなく、彼らが基礎的英語力の欠如を自覚し、とても自信が持てる状況にないところが出発点となっている。本学の例は１年次から積み上げ、指導に生かせる知識を確実に身に付けることにより苦手意識を克服し、自信を持って指導できる教員になるよう試案を提示」している。

そこで、「専門・教職に関する科目」の外国語に関する授業での学びをより有効なものとするために、その前段階として、今年度前期、「教養に関する科目」の「外国語・英語Ｉ」（必修、１単位、１年前期）及び「外国語・英語ｖ（選択、１単位、３年前期）において、授業実践に必要な英語力・指導力を身に付けるための英語教育に関する知識や体験的な活動、教育現場を意識できる内容を授業に組むとともに、英語に対する苦手意識の克服や学習意欲の向上へとつながるよう、授業実践を試みた。この実践の調査結果をもとに、小学校教員養成課程、特に教養課程における英語教育について考察する。

３.「教養に関する科目」における英語教育の取組

（１）「英語ｖ」における取組

教科書として「小学校外国語活動の進め方（Foreign Language Activities to Cultivate Children's Communication Ability)」（編著者：岡秀夫、金森強、発行所：株式会社　成美堂）を使用した。

15回の授業内容の概要は次のとおりである。

表１　「英語Ｖ」の授業概要

1回	クラスルーム・イングリッシュとは	授業のDVD視聴 「Benefit of using classroom English」を考える クラスルーム・イングリッシュ「あいさつ」
2回	多読について	多読の意義・概要説明、スマホで登録、図書館で多読用図書を選び、多読用図書を借用
3回	Skitと Role Playについて クラスルーム・イングリッシュ	Skitと Role Playの違いをプリント（英文和訳）で理解 クラスルーム・イングリッシュ「天気や曜日を尋ねる、授業を始める、ALTやゲストを迎える、子どもをほめる」
4回	クラスルーム・イングリッシュ	Role Playでクラスルーム・イングリッシュを使って授業の挨拶部分をグループ練習・発表
5回	クラスルーム・イングリッシュ	クラスルーム・イングリッシュ「いろいろな活動を行う」
6回	クラスルーム・イングリッシュ めあてと振り返りについて	クラスルーム・イングリッシュ「授業を終える」 「振り返り」の重要性を知る（プリントの英文和訳）
7回	クラスルーム・イングリッシュ	クラスルーム・イングリッシュに係る理論の理解 クラスルーム・イングリッシュ等をゆっくり、はっきり話し、ジェスチャーや表情なども交えながら伝える練習
8回	「ジェスチャーゲーム」①	３つのグループに分け、「ジェスチャーゲーム」を考え、スクリプトを作成
9回	「ジェスチャーゲーム」②	「ジェスチャーゲーム」をグループごとに発表
10回	「ジェスチャーゲーム」③	「ジェスチャーゲーム」をグループごとに発表 振り返り。スクリプトの改善・仕上げ
11回	「１時間の授業の組み立て方」	基本的な理論理解（プリントの英文和訳・教科書を用いて）
12回	「数字を教える」①	指導の実際と教材の具体について（プリントの英文和訳・教科書を用いて）
13回	「数字を教える」②	３つのグループごとにテーマを与え、そのアクティビティを考案
14回	「数字を教える」③	グループでアクティビティの考案とスクリプト作成
15回	「数字を教える」④	グループごとにアクティビティを発表。振り返り。スクリプトの改善・完成

基本的な理論を学び、クラスルーム・イングリッシュの習得を中心としながら、ペアやグループでアクティビティの考案やその英語のスクリプトを作成し、グループごとに発表をする。発表ごとに、HRTとALTの役は違う学生が行い、他の学生は児童役をする。発表後、他のグループの評価や自分のグループの振り返りとともに改善を行い、自分のグループのスクリプトを完成、レポートとして提出するというものである。この他にも、15回を通して、小学校での生活において、日常的に使われる教職員の職名、遊具などの英単語テストや、CDを使って基本的な音や実践的な発音練習などを、授業の最初に毎回行い、英語に関する基本的な知識の積み上げも行った。

図１　グループごとのアクティビティの発表①

図２　グループごとのアクティビティの発表②

（２）「英語Ｉ」の取組

教科書として「Hello, English -English for Teachers of Children-」（著者：相羽千州子、藤原真知子、Brian Byrd、Jason Barrows、発行所：株式会社　成美堂）を使用した。教科書は将来、小学校教員、幼稚園教員などを目指す大学生や短大生向けの総合英語テキストであり、架空の小学校・幼稚園で、ALTと学級担任がコミュニケーションをとる場面や実際の授業や学校生活における具体的な活動や場面がとりあげられている。英語の指導をするときも、単なるListeningや英文和訳や単語を並べ替える英作文ではなく、今後これらの英文を授業やALTとのコミュニケーションを図るために使用するのだという意識付けや、板書をするときには児童がわかるように意識して書くように声掛けをし、１年といえども、教育実習や教育現場で授業内容を役立てることを自覚させるような働きかけを行った。

また、「英語Ｖ」と同様に、音声や語彙などの英語に関する基本的な知識の定着にも取り組んだ。

４.「英語Ｖ」及び「英語Ｉ」の受講生を対象としたアンケート調査及び結果

「英語ｖ」及び「英語Ｉ」の受講生を対象にアンケート調査を実施した。アンケート調査の方法は、15回目にあたる最後の授業時に、出席者全員（「英語ｖ」29名、「英語Ｉ」27名）に対して２種類の調査用紙を配付し、その場で記入してもらい回収した。調査内容及び結果は次のとおりである。

（１）「英語ｖ」に係る調査概要及び結果

ア　授業内容の理解度を、４つの項目:「理解できた」、「ほぼ理解できた」、「あまり理解できなかった」、「理解できなかった」の４段階評価で回答してもらった。結果を図３に示す。

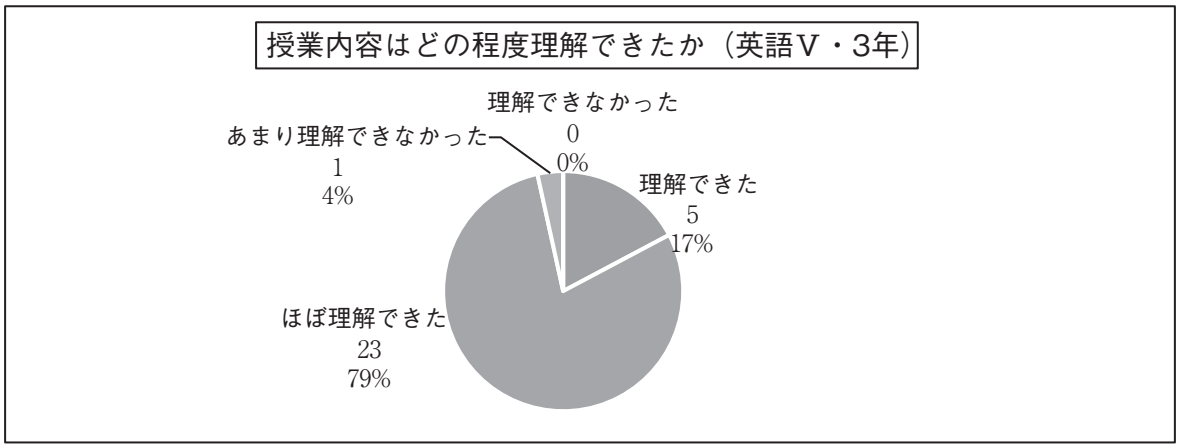

図３　授業の理解度

29名中、28名が「理解できた」「ほぼ理解できた」と回答しており、理解度は高い結果になっている。「あまり理解できなかった」と回答した１名の学生は、「どのような部分が理解しにくかったか」という問いに、「英語を苦手としているため、理解できなかったというより、周りのレベルについて行けなかった」と記述している。

イ　授業内容のうち、今後教育現場で役立つと考えたものを、８つの項目:「CDによる発音練習」、「単語テスト（語彙の習得）」、「クラスルーム・イングリッシュの習得・活動」、「アクティビティの考案・実施」、「DVD（実際の授業の視聴）」、「クラスルーム・イングリッシュ理論理解等のためのプリント」、「指導法等理論理解のための英語のプリント」、「その他（具体的に）」の中から、強く思う順に４項目を選択し、回答してもらった。「一番強く思うもの」を４点、「２番目に思うもの」を３点、「３番目に思うもの」を２点、「４番目に思うもの」を１点として集計した。結果を図４に示す。

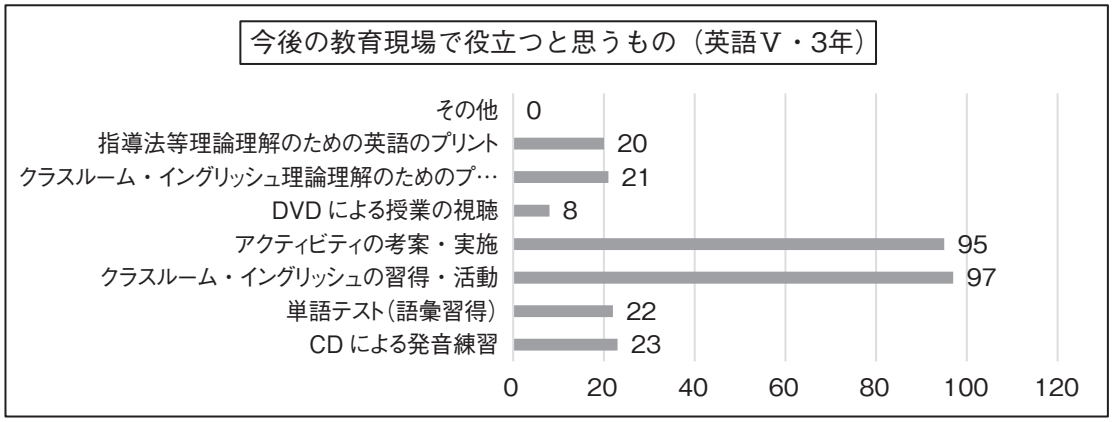

図４　授業内容の中で、今後教育現場で役に立つと思ったもの

「クラスルーム・イングリッシュの習得・活動」が97ポイントで一番得点が高く、「アクティビティの考案・実施」が95ポイントでそれに続く。「CDによる発音練習」23ポイント、「単語テスト（語彙の習得）」22ポイント、「クラスルーム・イングリッシュ理論理解等のためのプリント」21ポイント、「指導法等理論理解のための英語のプリント」20ポイントであった。

「クラスルーム・イングリッシュの習得」やそれを用いた活動、「ジェスチャーゲーム」や「数字を教える」というテーマのもとに行ったアクティビティの考案や発表は、学生にとってたいへん有意義なものであった。授業内容についての自由記述の調査も行ったが、ほぼすべての学生がその有益と感じた点について具体的に述べていた。

表２　「英語Ｖ」の授業についての自由記述

学生A（男子）	これまでの英語の授業とは異なり、教育現場に対応した内容をこの「英語Ｖ」で実施していただいたので、活動の考案や実施、クラスルーム・イングリッシュについてはとても力になったと思う。グループで１つの活動を作っていくのは、楽しかったし、とてもいい経験ができたと思う。また、学習したクラスルーム・イングリッシュを実際に活動に取り入れて実施するのは、将来自分が英語の授業をするのにとても勉強になった。
学生B（女子）	これまでは英語を自分が学んでいましたが、英語Ｖではクラスルーム・イングリッシュがあったり、実際の活動があったりと、現場で役立つことを学べてよかったです。また、グループワークが多かったので、協力しながら活動できました。クラスルーム・イングリッシュをほぼ毎回扱ったので、調べなくても自然と出るようになり定着していることを実感しました。実際の活動を通して、HRTとALTのそれぞれの役割を学ぶこともでき現場で生かしたいと思いました。
学生C（男子）	この英語Ｖの授業を通して、多くのことを学ぶことができた。単語テストを行うことで、日頃から英単語の勉強をして順調に覚えることができた。また、英文を訳す活動を行うことで忘れていた英文法についても思い出すことができとてもためになった。この授業では実際にクラスルーム・イングリッシュを使って授業を行う機会が何度かあったが、実際に使うことで、人前で将来することにも少しずつだが慣れることができ、最後には緊張せずにできるようになった。この授業では、実際の現場で使えそうなテクニックがいくつもあったので使えるときは、実習に行った際や自分が教師になった際にもぜひ活用していきたいと思った。
学生D（女子）	クラスルーム・イングリッシュを用いて実際にアクティビティを行うことで、伝えたいことがどうすれば伝えることができるのかを考えるきっかけとなった。難しく言い過ぎたら（児童が）理解できないし、簡単すぎたら説明不足で活動に取り組むことができないと感じた。また、HRTとALTの役割を明確にして、協力して授業を進めていかないとスムーズに授業は進まないと思った。英語での指示は難しいけど、ジェスチャーを使いながら一生懸命な姿を（児童に）見せることがまず大切になってくると思ったので、これから努力していきたい。
学生E（女子）	他の授業と比べてもレベルが高く、内容の濃い15回でした。実際の教育現場では思った以上に英語が話せないと（使えないと）いけないということを学び、児童に伝わる説明を考えるには、まず様々な英語を自分が知らないとダメだということを知りました。また、今後の学習につなげ、自らの武器になるように勉強していこうと思います。

ウ　15回の授業を通しての感想を自由記述してもらった。５名の記述を掲載する。

教育現場・授業場面を意識した記述としては、「教師になって役立つ経験になった」、「教師としてどう英語を教えていくかを考えさせられた」、「教壇に立って英語を教えることの難しさを痛感した」、「小学校教育で活用できる内容でよかった」、「英語の教科化に伴い、私が現場に立つころは、子どもたちに英語を教えなければならないという不安を少しでも解消できたので、とてもホッとしている。子どもたちに少しでも「英語が楽しい」と思われ、学習を通して、子どもたちのコミュニケーションの輪が広がるような活動や指導を目指していきたいです」というような記述が多くみられた。

また、「模擬授業のような場があることで活動を学べると同時にクラスルーム・イングリッシュを覚えることができた」、「知っている表現が増えた」、「実践的な力が身に付いた」、「できるだけ児童に分かりやすい英語を心掛けるようになった」、「英語だけでは足りない部分はジェスチャーを使うことで対応したり、視覚的に分かる授業を工夫したりできるようになった」、「積極的に英語を話そうとする児童になってもらうために、まず自分がそのようなことを意識しようと思った」、「他のグループの授業（発表）も見ることでこうしたらいいなという改善点もみつかって授業で活かせるなと思った」等、英語力の向上を実感したり、指導についての意識の変化が見られたりする記述も多かった。

さらに、現在の自分自身の課題への気づきや今後への意欲などに関する記述、「自分の英語力の低さに気づけた」、「もっと英語力をつけていきたい」、「もっと英語が上手に使えるようになりたい」、「児童に教えることへの不安を消していくためにも頑張っていきたい」、「もっとたくさんクラスルーム・イングリッシュを覚えて自然な授業をしていきたい」等も多くみられ、学習意欲の高まりも感じられた。

（２）「英語Ⅰ」に係る調査概要及び結果

ア　授業内容の理解度を、４つの項目:「理解できた」、「ほぼ理解できた」、「あまり理解できなかった」、「理解できなかった」の４段階評価で回答してもらった。結果を図５に示す。

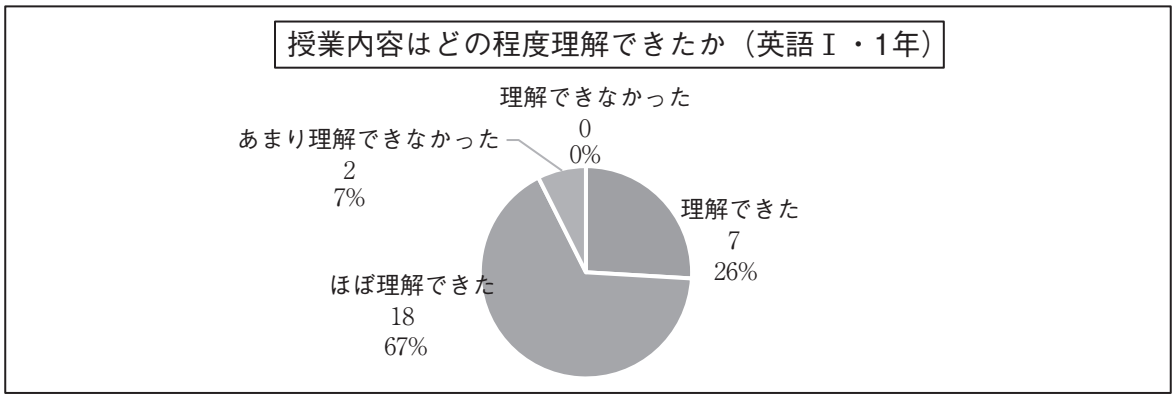

図５　授業の理解度

27名中、25名が「理解できた」「ほぼ理解できた」と回答しており、理解度は高い結果になっている。「あまり理解できなかった」と回答した学生は、「どのような部分が理解しにくかったか」という問いに、「自分は英語が苦手なのでわからないことが多かった」と記述している。

イ　授業内容のうち、今後教育現場で役立つと考えたものを、８つの項目:「CDによる発音練習」、「単語テスト（語彙の習得）」、「Dialogue」、「Listening」、「Reading（単元によってはReportとして英文和訳）」、「Topics」、「Useful Expression」、「その他（具体的に）」の中から、強く思う順に４項目を選択し、回答してもらった。「一番強く思うもの」を４点、「２番目に思うもの」を３点、「３番目に思うもの」を２点、「４番目に思うもの」を１点として集計した。結果を図６に示す

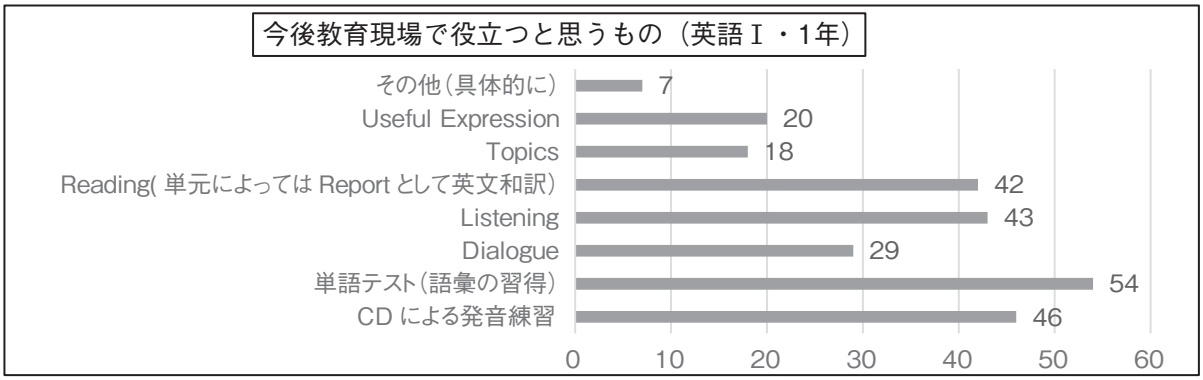

図６　授業内容の中で、今後教育現場で役に立つと思ったもの

「単語テスト（語彙の習得）」54ポイントが一番高く、「CDによる発音練習」46ポイント、「Listening」43ポイント、「Reading（単元によってはReportとして英文和訳）」42ポイントと続く。「Useful Expression」20ポイント、「Dialogue」19ポイント、「Topics」18ポイント、「その他（具体的に）」では、15回目の授業で行った「英語の絵本の読み聞かせ」をあげている学生もいた。１年生は、教科書を中心に授業を進めたが、「語彙」や「発音・聞き取り」、文構造や文法の知識を必要とするような「Reading」教材等、英語に関する基礎的な知識が今後教育現場で役立つと考えている学生が多かった。

表３　「英語Ｉ」の授業についての自由記述

学生F（男子）	音読やリスニングなど五感を使ったことは、小学校教育に大切なもので、授業を通して体感できた。多読では日頃からの英語にふれる時間を設け、読む能力や対応力が身についた。基本的英語に必要なことの基盤の確認になった。授業内で現在の現場での英語活動の様子もわかるようになってタメになった。
学生G（女子）	英語が一番の苦手教科だったので、最初すごく不安でした。でも、ペアになって音読したり、声に出して発音練習もできて、すごく楽しく学習ができ、英語が身に付きやすかったと思いました。小テストの単語や長文も、家で事前に調べてくることができたので、２度頭に入れるチャンスがあり、今までの英語の授業に比べると英語の理解がよくできたと思います。CDの発音練習は聞き取れない単語もなかにはあったけど、発音しているうちに、聞き取りもできるようになるのかなと思いました。最初不安だった英語も楽しく身に付けることができよかったです。
学生H（女子）	私は英語がとても苦手なのですが、単語テストやレポートをしているうちに少しですが、単語の意味が分かってきて、単語が分かると文章も読めてくるので、楽しく授業を受けることができました。最後の授業の絵本の発表もとても楽しかったです。誰かに読み聞かせをしたりするのはなかなか普段しないので、そういった練習もすることが大切だなと思いました。
学生I（女子）	私は英語が苦手なのですが、苦手なりに小テストやレポートをすることができました。レポートに関しては、もう少し文の構造に注意して読み進める必要があるなと思いました。単語ももちろんですが、連語も覚えなおす必要があるなと思いました。これからの教育の場では、英語が強く重視されて授業が進められると思います。苦手ながら、まずは前期の授業でやった簡単な会話を上達させ、教科書なしで会話できるように努力したいなと思っています。
学生J（男子）	前期の英語の授業を振り返ると、積極的に取り組めたと思います。小テストやレポート、多読も自分なりに努力を重ねることができたと感じているし、授業にも積極的に参加できたと思います。ただ、実際の学校現場で使えるようなレベルには達していないと思うので、まだまだこれから成長していきたいと思います。

ウ　15回の授業を通しての感想を自由記述してもらった。５名の記述を掲載する。

教育現場や授業場面を意識した記述としては、「小学校教諭に必要な知識を得られた」、「私は以前小学校教師になる上で、英語力はあまり必要ないのではないかと思っていました。将来英語が小学校でも教科化されるにあたって英語を話す力を身に付けることは大切だと考えが変わりました。夏季休業中でも英語の本を読むなどして、英語力を少しずつつけていきたいです」、「自分自身がただ学ぶだけではなく、これらの学んできたものを今度は子どもたちに教えてあげないといけないから、どうやったら子どもたちにより分かりやすく教えられるか、どうやったら英語をより好きになってもらえるかなどを意識しながら学んでいきたいと思った」、「子どもに聞かせるので正しい発音をしなければ、子どもが間違えて覚えてしまうと感じた」、「「英語Ｉ」の授業を受けて、ALTの先生と会話するときによく使うかもしれない単語や文章など、先生になったとき現場で絶対に使うと思って覚えた」というような記述が多くみられた。

また、「授業を通して英語の復習ができた」、「知らない単語を知ることができた」、「小テストやレポートで英文を訳すことや単語を覚えるやる気がでた。英文法をたくさん学び、理解することができた」、「英語が一番苦手である。単語が苦手で全く分からなかった。この英語の授業で小テストをやることが多かったので、多少はできるようになったと思う。しかし、まだまだできていないのでこれからしっかり勉強していきたい」、「発音は正直苦手で発表するときも間違えそうになったので、いろんな言葉の発音をしっかり身に付けたいなと思いました」、「毎回の単語テストやレポートで英語力が付いたと思う」等、英語力が付いてきたことを実感したり、実際に指導することについての意識の変化が見られたりする記述も多かった。

さらに、現在の自分自身の課題への気づきや今後への意欲などに関する記述、「これからも英語を頑張っていきたい」、「（絵本の読み聞かせ）また機会があれば改善していきたい」、「英単語の発音に慣れていないので、そういった力を付けていきたい」、「小テストを毎回高得点が取れるように勉強し

たのはよかった。しかし実際にできるほど英語力が付いていないので後期はもっと頑張っていきたい」、「英語には苦手意識があるけれど、この英語の授業は楽しく進めることができた。まだ英語自体は苦手だけれど頑張りたいと思えるようになった」等も多くみられ、学習意欲の高まりも感じられた。

５．まとめと今後の課題

（１）まとめ

４の調査結果から、「専門・教職に関する科目」の外国語に関する授業の前段階として、「教養に関する科目」における「英語」の授業について、半期の授業でも、教育現場・授業場面を意識させ、授業実践に必要な英語や知識、体験的な活動を授業内容に取り入れる試みは、小学校教員養成課程の学生にとって、有意義で、効果的であることは明らかである。教員になるという自覚や、教員になる上での自身の課題への気づきがあり、それを克服するため努力しようとしている姿も見られ、今後の学習意欲へもつながったり、さらには英語力の向上が見られたり、小学校英語や指導についての意識の変化があったことも明らかになった。

今後の授業内容の参考とするため、「英語ｖ」及び「英語Ｉ」の受講生を対象に、「自分の英語力で強化しておきたい分野」、「大学で身につけておきたい分野」についてそれぞれアンケート調査をした。「自分の英語力で強化しておきたい分野」では、８つの項目：「英語を聞くこと」、「英語を話すこと」、「英語を読むこと」、「英語を書くこと」、「発音」、「文法」、「語彙力」、「その他（具体的に）」の中から、強化したいと強く思う順に４項目を選択し、回答してもらった。「一番強く思うもの」を４点、「２番目に思うもの」を３点、「３番目に思うもの」を２点、「４番目に思うもの」を１点として集計した。「自分の英語力で強化しておきたい分野」については、１年生では「英語を話すこと」（71ポイント）、「語彙力」（50ポイント）、「英文法」（38ポイント）の順になっている。３年生では、「英語を話すこと」（82ポイント）、「発音」（58ポイント）、「語彙力」・「英文法」（33ポイント）の順になっている。「英語を話すこと」・「発音」・「語彙力」・「英文法」などを、学生は自分の英語力の課題・弱点と考えており、その克服や不安を軽減したいものと考える。

また、「大学で身に付けておきたい分野」についても、８つの項目：「発音」、「クラスルーム・イングリッシュ」、「児童に適した指導法」、「ゲーム・言語活動」、「レッスンプランの立て方」、「音声指導」、「評価」、「その他（具体的に）」の中から、身に付けておきたいと強く思う順に４項目を選択し、回答してもらった。「一番強く思うもの」を４点、「２番目に思うもの」を３点、「３番目に思うもの」を２点、「４番目に思うもの」を１点として集計した。結果を図７（１年）・図８（３年）に示す。

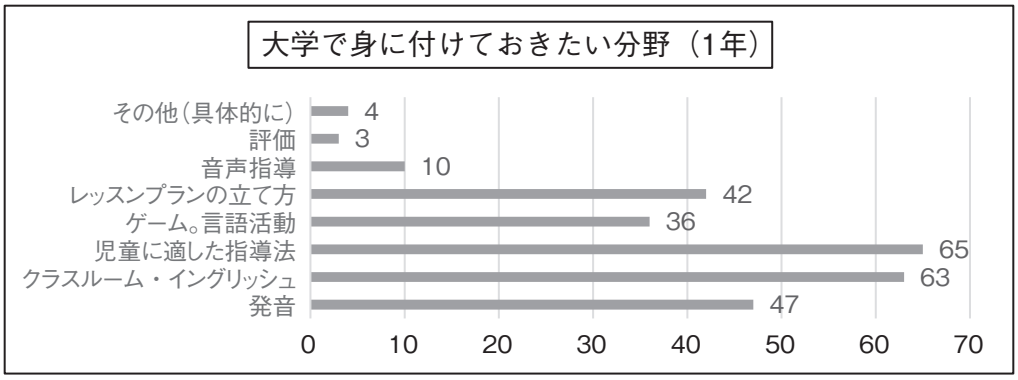

図７　大学で身に付けておきたい分野（１年）

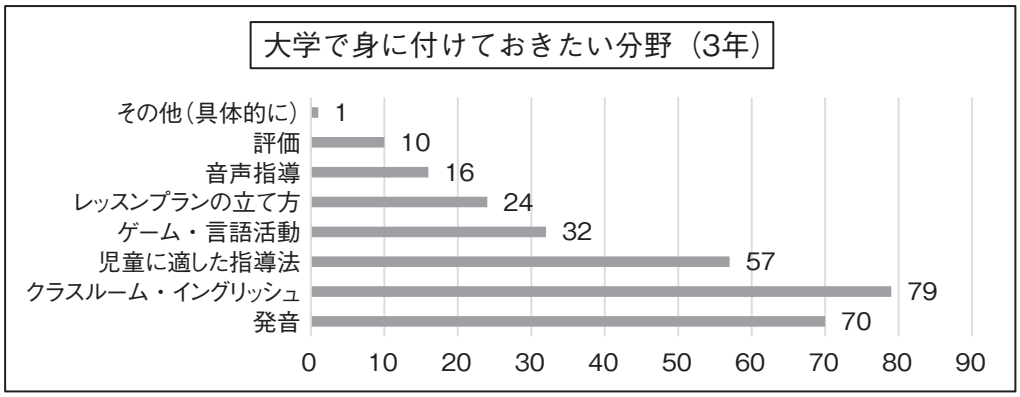

図８　大学で身に付けておきたい分野（３年）

「大学で身に付けておきたい分野」については、１年生では「児童に適した指導法」（65ポイント）、「クラスルーム・イングリッシュ」（63ポイント）、「発音」（47ポイント）、「レッスンプランの立て方」（42ポイント）、「ゲーム・言語活動」（36ポイント）の順になっている。３年生では、「クラスルーム・イングリッシュ」（79ポイント）、「発音」（70ポイント）、「児童に適した指導法」（57ポイント）、「ゲーム・言語活動」（32ポイント）の順になっている。授業実践に必要な英語力・知識として「発音」、「語彙」、「クラスルーム・イングリッシュ」などの習得や、小学校英語の指導法として「ゲーム・言語活動」、「レッスンプランの立て方」などを体験的に学習できるよう、段階的に組み込み、効果的な教員養成のカリキュラムを構成していく必要がある。

（２）今後の課題

小学校教員養成課程外国語（英語）コア・カリキュラムでは、「授業設計と指導技術の基本を身に付ける」、「小学校において外国語活動・外国語の授業ができる国際的な基準であるCEFR Ｂ１レベルの英語力を身に付ける」とある。今年度前期、「外国語の指導法」への段階的な学びとなるよう、１・３年生の「教養に関する科目」の英語の授業に取り組んだが、２年生の英語は「英字新聞（New York Times, The Japan Times,等）」の読解演習を行った。２年生では、15回の授業後の感想では、当然のことながら全く小学校英語に関する記述はなく、１年生に比べ、その意識も感じられなかった。小学校教員養成課程において、殊に本学の教養課程における英語教育では、英語を苦手とする学生が多い現状や今回の前期の取組の結果等を踏まえ、１年から３年までの系統的なカリキュラムを作成していくとともに、理論と実践、演習を融合させた形の授業をより一層実施する必要がある。「教科に関する科目（大学レベルの学問的・専門的内容）」と「教職に関する科目（児童生徒への指導法等）」等に分かれている科目区分を、教科の専門的内容と指導法を一体的に学ぶことを可能とする「教科及び教職に関する科目」に大括り化する文部科学省の動きにも対応しながら、「専門・教職に関する教科」における「指導法」や「指導内容」がより円滑に実施でき、成果を上げることができるよう、また実践的な指導力のある教員を養成することができるようより詳細な検討が必要である。

参考文献・引用文献

文部科学省（2017）.「小学校外国語活動・外国語研究ガイドブック」（一部掲載）
東京学芸大学（2017）.「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」
久村研（2017）.「小学校英語指導者の資質能力と外国語教育カリキュラムの指針を求めて」『第43回全国英語教育学会島根研究大会発表予稿集』，534－535.
岡秀夫・金森強（編著）（2012）.『小学校外国語活動の進め方―「ことばの教育」として』（株）成美堂，152.
西崎有多子（2017年７月30日）.「小学校教員養成課程における「小学校英語教育法」への段階的学び

を考える―苦手意識の克服と指導時の負担軽減を目指して―」，第17回小学校英語教育学会（JES）兵庫大会．兵庫：小学校英語教育学会（JES）．
西崎有多子（2017）．「小学校教員養成課程における「小学校英語教育法への段階的学びを考える―苦手意識の克服と指導時の負担軽減を目指して―」『第17回小学校英語教育学会（JES）兵庫大会発表要綱集』，107.